

## 最新デジカメは 4 年前とは全く別物 総論

「人物がピンボケ」「夜景を撮ったら手ぶれ」——。こんなガッカリする失敗も、最新のデジカメに買い換えるだけで、なくなります。シーンに応じて自動で最適な設定にしてくれるなど、デジカメの頭脳が数年前よりも飛躍的に進化しているからです。早速、「失敗知らず」のデジカメライフを手に入れましょう！

「最新のデジタルカメラは、画素数が上がっているだけ。今使っているデジカメで十分——」。そう思っている人が多いかもしれないが、実は正しくない。

確かに以前は、デジカメの進化と言えば、画素数のアップや撮影機能の強化などが主だった。だがいくら高性能でも、使いこなせないことには意味がない。

そこでデジカメメーカーは、暗い場所でもぶれを防ぐ「手ぶれ補正機構」や、自動で人物の顔にピントを合わせる「顔認識機能」など、簡単な操作で失敗写真を防ぐことに注力し始めた（図1）。中には、撮影シーンを自動で認識して、シャッターを押すだけで最適な設定で写せるものまである。

最新のデジカメなら、もはや何も考える必要はない。手ぶれやピンボケといった失敗写真は激減する。それだけで、価格は3万円前後と手頃。今こそ、絶好の買い換え時だ。

### ひと昔前のデジカメと最新デジカメでは大違い



図1 最新のデジカメは、画素数が上がっているだけでなく、「手ぶれ補正機構」や「顔認識機能」など、失敗写真を防ぐための機能が充実している

ひと昔前のデジカメと最新デジカメの違いを、もう少し詳しく見てみよう。

パッと見てわかるのが、液晶モニターの大きさだ。4年ほど前のデジカメが搭載する液晶の大きさは、1.5～2型が主流。最新デジカメならグンと大きく、3型が標準だ（図2）。撮影時にピントがきちんと合っているか確認しやすく、撮影した写真を人に見せるときにも、ずっと見やすい。



図2 最新デジカメなら、鮮やかで大きな液晶モニターを搭載。撮影時にピント位置を確認しやすく、撮った画像を再生するときにも見やすい

最新デジカメは、コンパクト機でも1000万画素以上ある。「そんな高画素は必要ない」と思うかもしれないが、1000万画素ならではのメリットもある。

1000万画素のデジカメで撮れる画像の解像度は、3648×2736ドット（図3）。画像の一部を切り取っても、印刷に十分な解像度がある。図4のように遠くから撮影したため、メインの被写体が小さく写っている写真でも、一部分を切り取って印刷すれば、迫力のある写真になる。

## 画像の一部を切り取っても十分な解像度がある



図3 L版程度の大きさで印刷するならば、200万画素で十分とされているが、1000万画素ならではのメリットもある（→図4）

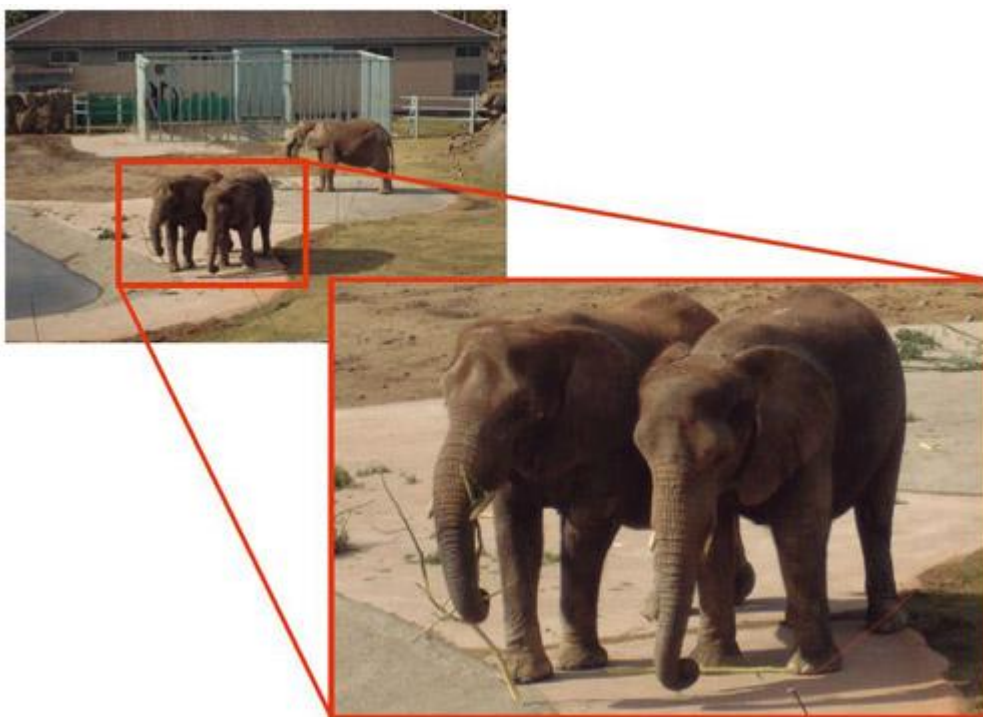


図4 1000万画素ならば一部を切り取っても、印刷に十分な解像度がある。遠くから撮ったため迫力に欠ける写真でも、被写体だけを切り出して印刷すれば、たちまち成功写真に早変わりする

そして、最新デジカメに買い換える最大のメリットが、夜景や逆光などの難しい撮影状況でも、簡単にきれいな写真が撮れることだ（図5）。

## 最新デジカメなら、難しい撮影シーンでも失敗しない

### 進化のポイント

- 暗い場所で手ぶれを防ぐ「**手ぶれ補正機構**」
- 人物の顔に優先的にピントを合わせ、顔の色を明るく写す「**顔認識機能**」
- マクロや夜景など、撮影シーンをカメラが自動で判断。押すだけで最適な設定でとれる「**シーン認識機能**」



最新デジカメ

図5 最新デジカメは画素数が上がっているだけではない。手ぶれ補正機構や顔認識機能、シーン認識機能などがあり、簡単な操作で失敗せずに撮れる

美しい夜景も、手ぶれしては台無しだ。手ぶれ補正機構があれば、三脚がなくても暗い場所でぶれずに撮れる（図6）。

### 手ぶれ補正があれば、暗い場所でもぶれずに撮れる



### 拡大表示

図6 室内や暗い場所では手ぶれが起きやすい。デジカメに手ぶれ補正機構があれば、三脚がなくても手ぶれを防ぐことができる

また、記念写真で背景にピントが合っていたり、逆光で顔が暗いという失敗もよくある。顔認識機能があれば、自動で顔にピントが合い、明るさも自動調節してくれるので、失敗しない（図7）。

## ■人物の顔を検出して、ピントと明るさを自動で最適の設定に



### 拡大表示

図7 背景にピントが合って、肝心の人物がピンボケに（左図）。顔認識機能があれば、自動的に人物にピントを合わせ、顔が暗く写る場合は自動で明るさも調節してくれる

2008年秋発売のデジカメでは、“失敗写真を防ぐための機能”が一段と強化されている。それが、撮影状況をカメラが自動で認識して最適な設定で撮れる「シーン認識機能」だ。

従来は、マクロや夜景、逆光など「オート」ではうまく撮れないとき、ユーザーが撮影状況に応じてカメラの設定を変える必要があった。操作が面倒なうえに、正しい撮影法を知らないと、失敗写真しか撮れない。最新デジカメなら、シャッターを押すだけでカメラがシーンを判別して、設定を自動で変更して撮れる（図8）。

## ■夜景バックの難しい撮影も、シャッターを押すだけで撮れる!



### 拡大表示

図8 夜景をバックに人物写真を撮るときは、フラッシュの設定を「スローシンクロ」にする必要がある。シーンを自動で認識できるカメラなら、設定変更は不要。シャッターを押すだけでよい

このほか、白飛びや黒つぶれを防いで、適正な明るさの写真が撮れるようになっているのもうれしい（図9）。

## ■ 暗い部分を自動的に明るく補正してきれいに写せる



### 拡大表示

図9 最新デジカメでは、明るい部分が白飛びするのを防いだり、陰の部分が暗くなるのを防いで、自動的に適正な明るさで写るように工夫されている

デジカメを買おうと、いざ店頭で足を運んでも、多くの機種が並んでいて、迷ってしまう。

そうならないためには、事前に自分にとって必要な機能を把握しておくことが重要だ。ここでは、製品選びで迷わないよう、重視すべき機能と、その仕組みについて詳しく紹介しよう。

最新デジカメは多くの機能を備えているが、その中で重視したいポイントは、図1に挙げた6つの機能だ。これらのうち、自分にどの機能が必要か見極めよう。



拡大表示

図1 最近のデジカメで広く搭載されている機能は、主に6つある。手ぶれ補正機構、顔認識機能、シーン認識機能、自動追尾 AF は、簡単な操作で失敗写真を防ぐための機能だ。ワイド撮影機能と高倍率ズームは、どんな写真が撮りたいかによって、必要になるもの。自分に必要な機能はどれかしっかり見極めよう

手ぶれ補正機構は必須条件

「光学式」以外は要注意

図1の6つの機能のうち、必ず欲しいのが、手ぶれ補正機構だ。雰囲気の良いレストランや、夜景のきれいな場所で写真を撮ったときに、手ぶれしていてガッカリした経験があるだろう。室内や夜など、暗い場所では、光を取り込むのに時間がかかるため、シャッターが開いている時間が長くなる。その間にカメラを持つ手が動いてしまうと、手ぶれが起きてしまう(図2)。

手ぶれ  
補正

暗い場所でもぶれずに撮れる

必須度 ★★★★★



図2 室内や夜など光が少ない場所では、シャッター速度が遅くなるので手ぶれが起きやすい。手ぶれ補正機構があれば、ぶれを防げる

手ぶれ補正機構付きのカメラは、センサーがカメラの動きを感知し、カメラとは反対の方向に補正レンズを動かすことで、手ぶれを打ち消してくれる（図3）。レンズの代わりに CCD を動かすタイプもあるが、効果は同じだ。



## ■ レンズやCCDが動いてぶれを打ち消す

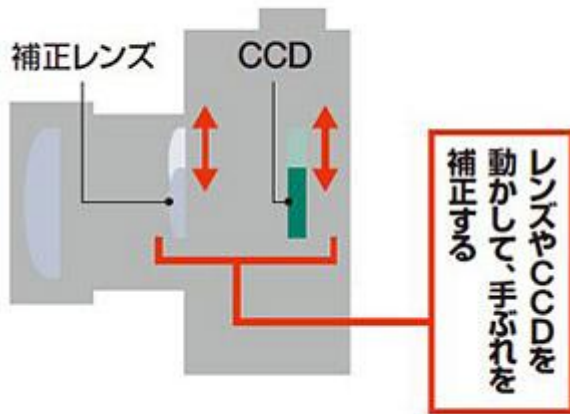


図3 手ぶれ補正機構は、手ぶれを察知すると補正レンズがカメラとは逆方向に動くことで、ぶれを相殺するもの。補正レンズの代わりに CCD を動かすタイプもあるが、どちらも効果は同じだ

では、手ぶれ補正機構がある場合とそうでない場合で、どのくらい差があるのだろう。

手ぶれしないで撮れる条件は、ズームを使わないときで、シャッター速度が  $1/30 \sim 1/40$  秒以上 (図4)。例えば、シャッター速度が  $1/8$  秒と遅い場合、そのままでは手ぶれが起きる。手ぶれ補正機構があれば、同じ条件でも  $1/60$  秒相当で撮れるため、手ぶれが起きない (図5)。

## ■ 手ぶれしないシャッター速度の限界は？



図4 画面に表示されるシャッター速度に注目しよう。ズームを使わないと

きで1/30～1/40秒より遅いと、手ぶれが起きる。ズームを使うときは、さらに速いシャッター速度が必要だ

### 手ぶれ補正オン時の効果は…

実際のシャッター速度	1/8秒	1/15秒	1/30秒
手ぶれ補正がオンの場合	1/60秒相当	1/125秒相当	1/250秒相当

図5 シャッター速度が1/8秒のときに手ぶれ補正をオンにすると、1/60秒と同等の写真が撮れる。手ぶれ補正機構があれば、手ぶれを格段に減らせることがわかる

ただし、デジカメのカタログに「手ぶれを防いで撮れる」と書かれていても、手ぶれ補正機構がない場合もあるので注意しよう。

図3のようにレンズやCCDを動かす仕組みの手ぶれ補正機構があれば、「光学式（レンズシフト式）」または「CCDシフト式」と書かれている。方式が表記されていない場合は、単にISO感度を上げてシャッター速度を速くするだけのことが多い（図6） [注1]。

## 「本物」の手ぶれ補正付きか見分けるコツ

光学式手ブレ補正搭載、世界最薄\*1 13.9mm\*2のボディ

高感度による高速シャッターでは、ブレは防げず、レンズが目立ってしまう。これを補正する「光学式」が追求し、約1/1000秒の高速シャッターでも、高感度でのブレ補正を実現しました。シャッターを押す際のわずかな手の揺れも内蔵ジャイロセンサーが感知し、シフトレンズで手ブレをしっかり補正できます。

\*1 光学式手ブレ補正を搭載したカメラの最薄ボディは13.9mm(約0.55インチ)です。  
\*2 標準レンズでの最薄ボディ



光学式手ブレ補正



失敗例(手ブレ)



光学式手ブレ補正

光学式手ぶれ補正あり

---

光学式手ぶれ補正なし

**AVTCO** 手ぶれ・被写体ぶれを抑えて、キレイ撮り。  
最高ISO6400の超高感度Digital SR  
(デジタルスーパーシャッター)

撮影中こくある失敗の2つが、手ぶれ・被写体ぶれ。それを解消してくれるのが、Digital SR。手ぶれ・被写体ぶれが起まらずに室内や夕方の撮影でも、最高ISO6400まで自動で感度を上げて(高速シャッターでキレイにくっきり写します。



ISO6400まで自動で感度を上げて高速シャッターでキレイにくっきり写します。

光学式手ぶれ補正なし

図6 どちらも手ぶれ補正付きのように見えるが、本当に手ぶれ補正があるのは上図の機種。「光学式(レンズシフト式)」または「CCDシフト式」という言葉がなく、「ISO感度を上げる」と書かれている場合は要注意

[注1] 手ぶれ補正の仕組みには、ほかに「電子式」と呼ばれるものもある。電子式は動画では効果的だが静止画では効果が薄く、画質の劣化を招くため、電子式を採用するデジカメは少ない

ISO感度とは、CCDの光に対する感度のこと。ISO感度を倍にすると、シャッター速度も倍の速さになるが、ISO感度を上げるほど画質が落ちるといったデメリットがある(図7、図8)。

## ISO感度を上げると画質が低下する



図7 ISO感度の数値を上げるとシャッター速度が速くなるのでぶれを防げるが、低いISO感度で撮影したほうが、画質がよい。ISO1600の写真と比べてみよう（→図8）

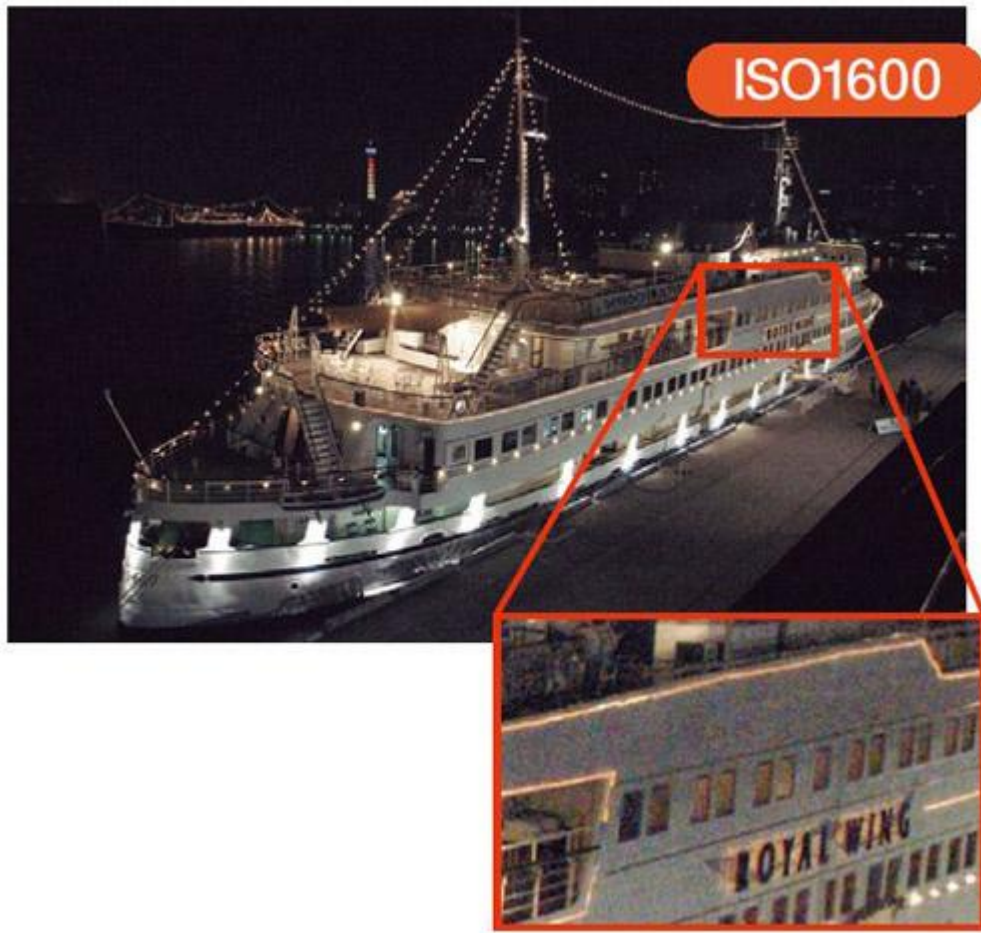


図8 ISO200で撮影した図7の写真に比べて全体的に色の乗りが悪く、画像がざらざらしている。細部を見ると、色むら（ノイズ）が多く出ていることがわかる

手ぶれ補正機構があれば、同じ条件でも、画質を落とすことなく撮影できる。また手ぶれ補正機構のほうが、ISO感度を上げる方法よりも補正の度合いが大きく、効果も高い。

さらに、暗い場所で動く被写体を撮るなど、高速シャッターが必要な場合は、手ぶれ補正を効かせたうえで、ISO感度を上げることもできるので、よりぶれに強いわけだ。

### 人物の顔を自動で検出 シーン認識なら押すだけ

家族旅行や職場の宴会など、人物の写真を撮る機会が多い。しかし、せっかくの記念写真で背景にピントが合ってしまっていたり、逆光で顔が暗くつぶれていたなどの失敗はありがちだ（図9）。

顔認識

## 人物の顔を自動で検出

必須度 ★★★★★



図9 太陽や空をバックに撮影すると、人物の顔が暗くなる。顔認識機能があれば、自動で顔にピントと露出（明るさ）を合わせてくれる

ピンボケや暗くつぶれてしまった写真は、画像編集ソフトを使ってもうまく修整することが難しい。このため、ピントと露出（写真の明るさ）をきちんと合わせて撮ることが重要になる。

従来のデジカメでは、露出補正などの操作が必要で、手間がかかった。しかし、デジカメに顔認識機能があれば、カメラがフレーム内にある人物の顔を自動で検出して、顔にピントを合わせてくれるので面倒がない。

ピントを合わせるだけでなく、逆光などで顔が暗くなる場合は、顔が明るく写るように自動調節してくれる（図10）。

## ■ 顔認識機能をオンにするだけ

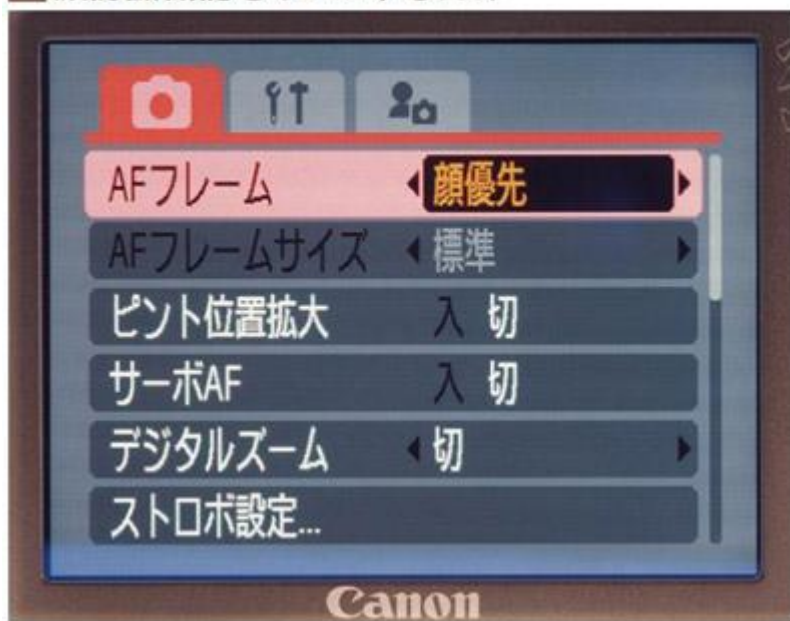


図 10 顔認識機能は、輪郭や目鼻の位置から人物の顔を自動で検出する。従来は露出補正などで顔を明るくする必要があったが、顔認識機能があればオンにするだけでよい

複数の人物がいる場合は、全員にピントと露出が合うようにカメラが自動調節してくれるので、人物写真で失敗がなくなる。顔認識機能も、手ぶれ補正機構と同様に、欠かせない機能だ。

また一部には、顔認識機能を強化して、肌を滑らかに写したり、笑顔になると自動でシャッターを切る機能を持つデジカメも登場している。

### 押すだけできれいに撮れる カメラがシーンを自動判断

2008 年秋発売のデジカメのトレンドとなっているのが、カメラが撮影状況を自動で認識するシーン認識機能だ(図 11)。

シーン  
認識

## 撮影状況を自動で判別

必須度 ★★★★★



図 11 通常のデジカメでは、被写体に 50 センチ前後よりも近づくとときは、そのままではピントが合わない。モードの切り替えが必要だ

以前のデジカメでは、花をアップで写したいときは「マクロ」モードに切り替えたり、夜景をバックに人物写真を撮るならフラッシュを「スローシンクロ」モードに変更するといった手間がかかった (図 12)。



## 面倒なモードの切り替えが不要に!



図 12 従来のデジカメは、「マクロ」ボタンを押してモードを切り替える。最新デジカメなら、撮影シーンを自動で認識するモードにしておくだけで、通常の撮影も、マクロや夜景などの特殊な撮影も、全部自動で撮れる

正しい設定を知らなかったり、設定を変えるのが面倒で、せっかくの機能を利用しない人も多かった。シーン認識機能があれば、シャッターを押すだけで最適な設定で撮れる（図 13）。

## カメラが自動で状況に適した設定で写す



図13 光量が少なければ夜景、ピント位置が近ければマクロといった具合にカメラが撮影状況を判断して最適なモードにする。認識率も高く、十分実用的だ

シーン認識機能は2年ほど前から一部の機種で搭載され始めた。この秋のモデルではシーン認識の精度が以前より向上していて、実用度はかなり高い。手軽にきれいな写真が撮りたいなら、この機能が付いたデジカメを選ぼう。(図14、図15)。



図14 夜景をバックに記念写真。従来のデジカメでは、オートのままだとフラッシュが光って、夜景がきれいに写らない



図 15 シーン認識機能があれば、難しい撮影もシャッターを押すだけ。夜景も人物も、両方きれいに写せる

ピントの自動追尾機能にも注目だ。動き回る子供や走っているペットなど、動く被写体をピンボケせずに撮るのは、かなり難しい（図 16）。最初の位置から被写体が動くと、再度ピントを合わせ直す必要があるからだ。

自動追尾 AF 動く被写体をピントが追いかける  
必須度 ★★★★★



拡大表示

図 16 歩いている人や、動き回るペットをうまく撮るのは、かなり難しい。最初にピントを合わせた位置から被写体が動くと、ピント位置がずれるため、再度ピントを

合わせる必要があるからだ

被写体が動いても、自動でピントを合わせ続ける機能が、自動追尾 AF（オートフォーカス）だ（図 17）。車など動きが速いものは追尾できないこともあるが、人物が歩くスピードなら十分追尾可能だ。子供やペットの写真をうまく撮りたいなら、便利な機能だ [注 2]。

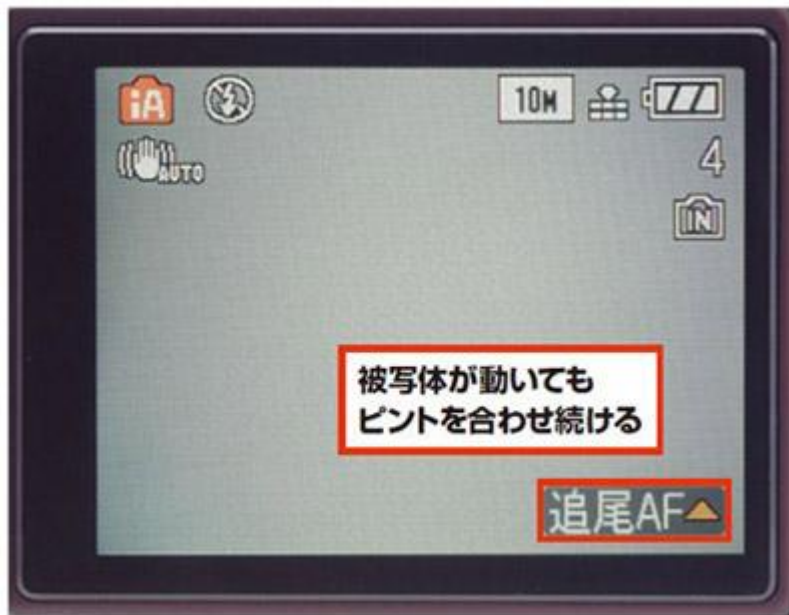


図 17 自動追尾 AF 機能搭載のデジカメなら、最初にピントを合わせた被写体をそのまま追いつけられるので、動いている人物やペットも楽に撮ることができる

[注 2] 顔認識機能でも、人物が動くとピントが追従する。ただし横向きの顔は検出できない場合もあるため、動く人物を撮るには自動追尾 AF があったほうがよい

## 広い範囲を写すワイド撮影や 高倍率ズーム搭載の機種も

観光名所で写真を撮るとき、後ろに下がっても全体がフレームに入らない、といったことがある。そんなときに便利なのが、ワイド撮影に強いデジカメ（図 18）。通常のカメラは、ズームを使わないときの焦点距離が 35 ミリ前後だが、ワイド撮影に強いデジカメは 28 ミリ前後から撮影できる。より広い範囲を写真に収めることができるわけだ（図 19）。

ワイド  
撮影

広がりのある風景を写す

必須度 ★★★★★

通常のデジカメ  
35mm



ワイド撮影に強いデジカメ  
28mm



図 18 通常のデジカメは広角 35 ミリ前後だが、ワイド撮影に強い機種なら 28 ミリ前後から撮影できる。同じ位置からでも、より広い範囲を写真に収められる

## 同じ位置から撮影しても広い範囲が撮れる

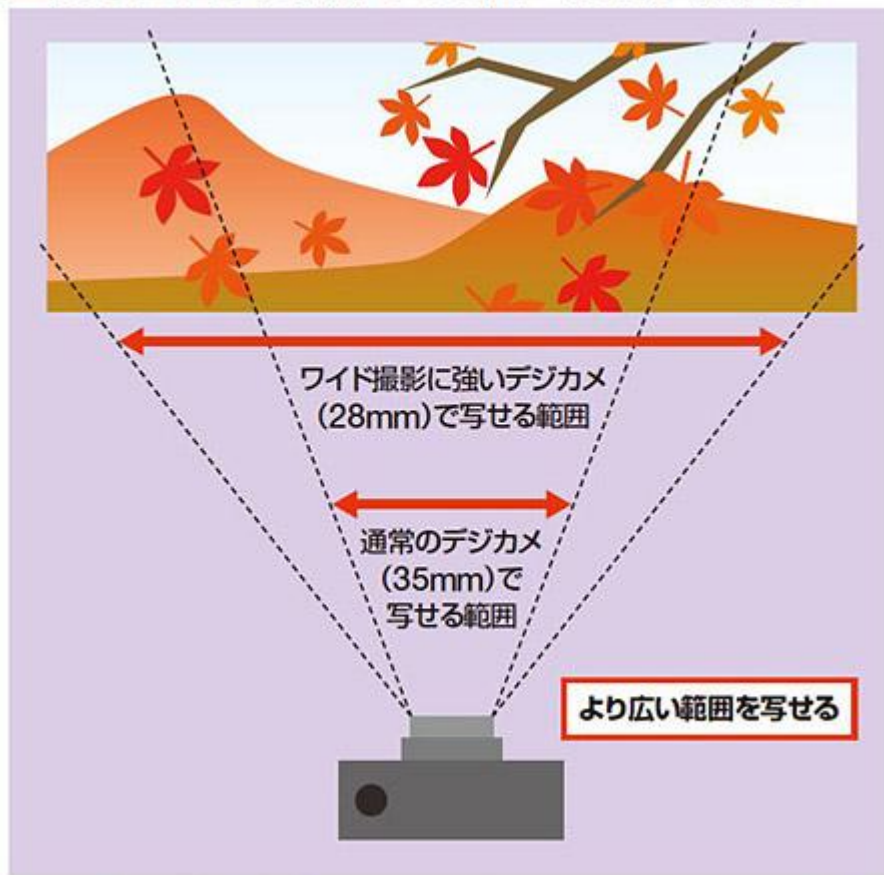


図 19 ワイド撮影に強いデジカメならより広い範囲を写せるので、室内など後ろに下がれない場所の撮影や、広々とした風景を撮りたいときに役立つ

狭い場所で撮影するときだけでなく、広々とした風景を写真に撮りたいときにも、ワイド撮影に強いデジカメが役立つ。

最後に、ズームの倍率による違いを見てみよう（図 20）。

高倍率  
ズーム

## グッと寄った迫力ある写真に

必須度 ★★★★★

3倍ズーム



10倍ズーム



図 20 スポーツ観戦や電車、飛行機など近寄れない遠くの物も、高倍率ズームがあれば画面いっぱいにズームアップして撮れる

通常のデジカメは、3～5倍の光学ズームを搭載している。運動会などで離れた場所から我が子の顔をアップで撮りたい場合には、もっと高倍率のズームを搭載する機種がお勧めだ（図 21）。

### ■ 3～5倍が標準だが10倍ズームの機種も

標準的なデジカメ

光学3倍～5倍ズーム

望遠に強いデジカメ

光学7倍～10倍ズーム



図 21 望遠に強い機種は7倍以上の光学ズームを搭載する。なお、「デジタルズーム」は画像の一部を切り取って拡大する擬似的なズーム。光学ズームとは異なるので注意しよう

ズームに強いデジカメは、7倍～10倍の光学ズームがある。3倍ズームとの違いは一目瞭然(図22)。ただし、高倍率ズームを搭載する機種は本体サイズが少し大きめ。気軽に持ち歩けるコンパクトさを重視するか、ズームの倍率を重視するか、決めておこう。

### 倍率の違いで見え方がこれだけ違う



### 拡大表示

図 22 ズームなしでは人物が小さくしか写らない。3倍ズームでもやっと上半身が写る程度。10倍ズームなら顔をアップで写せるので、人物のイキイキとした表情が伝わる写真になる

## 美肌や笑顔検出、ハイビジョン動画撮影も

最新デジカメは、これまで紹介した機能以外にも、ユニークな機能を備えている。

EXILIM ZOOM EX-Z300 は、人物の肌を滑らかにしてきれいに写す「メイクアップ機能」を搭載。最近のデジカメは高画質なので、肌荒れも鮮明に写ってしまう。メイクアップ機能をオンにすると、肌が滑らかになり、顔の色もよくなる。普段の撮影はデジカメでも、証明写真などの大事な顔写真は写真館で撮るといふ人も多いだろう。プロが撮ったような顔写真が手軽に撮れるので、便利だ（図1）。

きれいな顔写真が手軽に撮れる

「メイクアップ」機能

搭載機種：EXILIM ZOOM EX-Z300 (カシオ計算機)



図1 肌を滑らかにして、顔色をよくする「メイクアップ機能」。高度なライティングを使ってプロが撮影したような顔写真を簡単に撮ることができる

デジカメで動画を撮影することも多いだろう。最近では、ハイビジョン画質の動画が撮れる機種も登場している（図2）。一般的なデジカメの動画よりもずっと高解像度なので、DVDビデオを作成したり、大画面テレビに映

してもきれいだ (図 3)。

**ハイビジョン動画が撮れる**

**「ハイビジョン動画」機能**

搭載機種：LUMIX DMC-FX37 (パナソニック) など

高解像度の動画が撮れるデジカメ  
1280×720ドット

一般的な  
デジカメの動画  
640×480  
ドット

図 2 一般のデジカメで撮れる動画よりも高解像度な、ハイビジョン画質 (1280×720ドット) の動画を撮れるデジカメもある



図 3 LUMIX DMC-FX37 は、別売のコンポーネントケーブルをテレビの D 端子に接続して、動画を高画質で大画面テレビに映すことができる

子供の表情はくるくる変わる。「今笑った」と思ってシャッターを切っても遅い。そこで便利なのが、笑った瞬間に自動でシャッターが切れるデジカメ（図4）。スマイル検出機能をオンに設定すると、被写体が笑ったと同時に自動でシャッターが切れる（図5）。

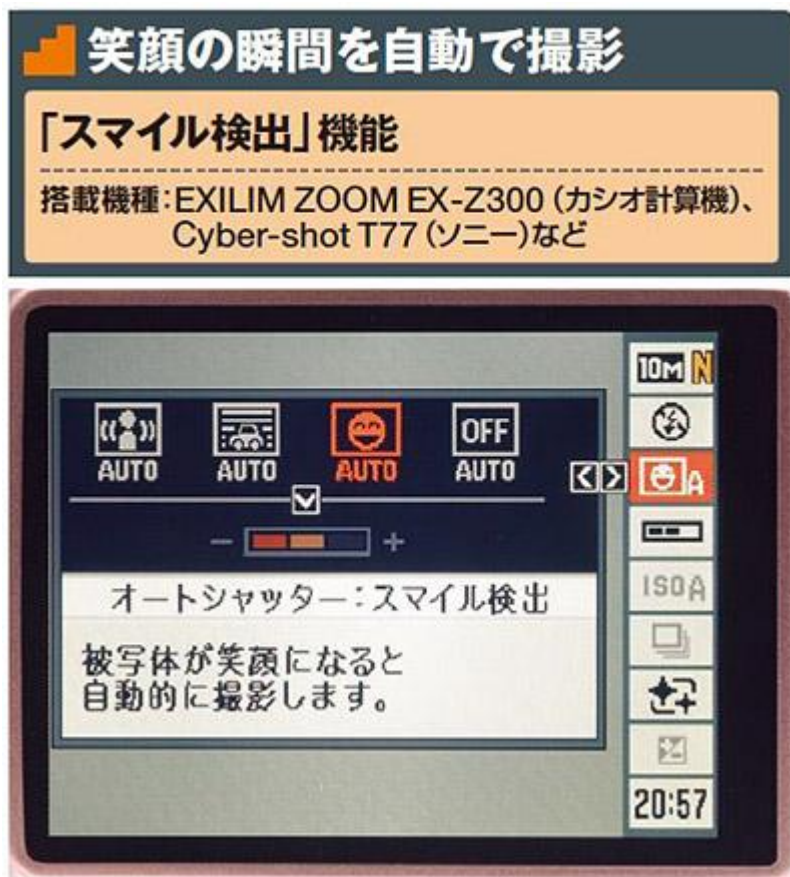


図4 顔認識機能をさらに強化して、笑顔を自動検出するデジカメも。「スマイル検出」をオンに設定すると、人物が笑ったときに自動で撮影できる



図5 ユーザーがシャッターボタンを押さなくても、人物が笑った瞬間に自動的にシャッターが切れるので、笑顔の写真が簡単に撮れる